

世紀転換期（19—20世紀）のドイツにおける 「トゥルネン＝スポーツ」抗争の対立軸としての身体 —大衆社会の登場とシンボル—

Über den Körper als eine Achse des Kulturkampfes zwischen Turnen und Sport in Deutschland — Der Auftritt der Massengesellschaft und ihrer Symbole —

釜崎 太*
Futoshi KAMASAKI*

【Zusammenfassung】

Diese Untersuchung beschäftigt sich damit, was in der Jahrhundertwende vom 19. zum 20. Jahrhundert eine Achse des Kulturkampfes zwischen Turnen und Sport, die Mächte “von unten nach oben” und “von oben nach unten” verbunden hat, gewesen ist, und wo dieser Kulturkampf angekommen ist.

Dazu gehört Folgendes: Erstens war der Sport aus England im Deutschland der Jahrhundertwende mit kommerzialisiertem Charakter und zugleich mit feudalistischen Symbolen –z.B. kaiserliche Uniformen usw.– verbreitet. Daher kam es zu einer Inflation von feudalistischen Symbolen und die Sportbewegung vermochte zur gesellschaftlichen Modernisierung beizutragen, die durch das Konkurrenz-, Leistungs-, Gleichheits-, und Öffentlichkeitsprinzip gekennzeichnet war, und die die Turnbewegung zu Anfang des 19. Jahrhunderts nicht verwirklichen konnte.

Zweitens wurde diese Verbreitung des Sports nicht nur durch konsequente Gedanken der Sportler, sondern auch durch symbolische Darstellungen des Körpers auf Zeitschriften und bei Körperform-Wettbewerben vermittelt. Daher war der Körper als Symbol eine Achse des Kulturkampfes zwischen Turnen und Sport für die Masse geworden.

Drittens wurde bei der Stadionweihe 1913, die vor den Olympischen Spielen in Berlin 1916 stattgefunden hat und bei der auch Kaiser Wilhelm II. teilgenommen hat, die Masse durch “Leibesübungen (Turnen und Sport)” festlich und symbolisch in eine deutsche Nation integriert. Dadurch haben die Leibesübungen zur Selbstdisziplinierung der Massen beigetragen.

【Schlüsselwörter】 Festlichkeiten, Symbol, Selbstdisziplinierung

1. はじめに

近代ドイツにおけるイギリス・スポーツの受容には、「下から」と表現しうるような、市民的な運動が内在していた。例えば、近代ドイツにおけるスポーツの普及過程を「スポーツ運動 (Sportbewegung)」と捉える Christiane Eisenberg もまた、社交への興味や特定種目への個人的情熱に支えられた「下から」の受容過程があったことを指摘している。しかしその一方で、Eisenberg は、重商主義への批判的視点を内包する「ドゥ・コメルス (doux commerce)」¹⁾ という観念

が長く文化の間に残り続けたイギリスとは異なり、すでに高度工業化の時代に突入していた19世紀後半のドイツにおけるスポーツの普及過程には、「上から」と表現すべき権力作用が強力に伴っていたことも指摘している。この「上から」と表現される権力作用が顕在化するのが、近代オリンピック大会への参加をめぐる「トゥルネン＝スポーツ」抗争が展開される世紀転換期（19～20世紀）のことである。

近代ドイツにおいて、「下から」の動きが「上から」の権力作用と接続していくなかで、「トゥルネン＝ス

* 弘前大学教育学部保健体育講座
Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Hirosaki University

ポーツ」抗争と呼ばれる文化抗争は、誰の、何を、対立軸としながら争われ、如何なる地点へと達着することになるのか。近代オリンピック大会への参加をめぐる動向を中心に、この問いに答えようとするのが、本研究の目的である。

2. 世紀転換期のドイツにおけるスポーツの普及過程 — 「社会」と「文化」、「大衆」と「シンボル」 —

周知のように、近代ドイツにおいてスポーツが定着・普及するのは、その主な担い手となる市民階級がドイツ経済の主役となり始める世紀転換期のことである。世紀転換期のドイツ市民を広範なスポーツ参加へと促したのは、Eisenberg が指摘するように、個人的な興味や情熱であった以上に、スポーツに開かれた「金銭と presteege の獲得の可能性」²⁾ であった。例えば、フットボールは勤め人 (Angestellte) の社会的 presteege と結びついた 1890年代に、テニス土地売買が過熱化した 1900年代に、それぞれ著しい市民階級の参入を招いている³⁾。こうしたスポーツと経済の結びつきは、広義の「スポーツ専門職者 (Berufssportler)」を生み出している。1907年の自転車競技の賞金総額は110万マルクに達し⁴⁾、1911年の展覧会には24もの国内製造業者がスポーツ用品を出展し、スポーツ施設専門の建築家が登場している⁵⁾。しかし、スポーツ専門職の形成に何よりも大きな影響を与えたのはメディア市場の拡大であった。19世紀後半にはスポーツ専門雑誌の創刊が相次ぎ、大衆読者の獲得をめぐる日刊紙の競争を契機に、スポーツのメディア価値が広く知られるようになり、「スポーツ・ジャーナリスト」と呼ばれる職業分野が確立されたのである⁶⁾。

この新しい職業分野の象徴的な人物が Carl Diem であった。極貧の家庭に育った Diem は、「一年志願兵」(図1)⁷⁾の後、商店に勤め、1906年にオリンピック中間大会の報道のための依頼を受ける。Diem が経験した「商人」と「ジャーナリスト」はどちらも階級独占的な職業領域ではなかったために、商人は「客」に、ジャーナリストは「読者」に配慮しなければならなかった⁸⁾。読者からの支持を得た Diem は、帰国後『Allgemeinen Sportzeitung』に登用され、1907年には Scherl 出版社に月給275マルクで雇用される⁹⁾。さらに、ベルリンでのスポーツ大会の開催に成功するな



図1 Carl Diem 一年志願兵

ど、組織者としても能力を発揮しはじめた Diem は¹⁰⁾、1905年にベルリン陸上競技連盟の会長に、1908年にはドイツ陸上競技スポーツ局 (Deutsche Sportbehörde für Athletik) の会長に就任する¹¹⁾。このポストは Diem にとって大きな意味をもった。Diem は、ドイツ・オリンピック帝国委員会 (Deutsche Reichsausschuss für Olympische Spiele: 以下「DRAfOS」) の委員をつとめる政治家や官僚らと協働することになったのである。1913年、Diem は官僚出身の政治家であった DRAfOS の会長 Viktor von Podbielski から「1916年ベルリン・オリンピック大会の事務総長」(年8千マルク) のポストを与えられ¹²⁾、スポーツ、メディア、政治の三者が交差する重要な位置に身をおくことになるのである。世紀転換期のドイツにおいては、賞品にも大きな presteege が付与されていた(図2)。例えば、銀の燭台、書斎の机セット、美しく彫琢されたグラス、クリスタルの皿、焼肉裁断用の食器セット(紳士の使命は、食卓で焼肉を切り、ガラス皿にのせて客人に取り分けることであった)などがスポーツの賞として提供された。家に招いた客人に、「興奮してその説明を求められた」とき、「謙遜して、当然のように短く言うのである。その『盆 (Tablett)』が気に入ってもらえたなら、嬉しいことです。ちなみに、それは競馬の賞なんです」¹³⁾。



図2 ベルリン陸上クラブ Hermann Müller のトロフィー収集

自転車競技と自動車レースにおいては、商品の宣伝効果がいち早く認識されている。「世界チャンピオン (Weltmeisterfahrer) の Thaddäus Robl は Express で走った」と、1905年の Express 自転車製作所の広告に記されている¹⁴⁾。自動車レースでは例えば、国際的なレースとして注目を集めていた Gordon-Bennett レースにおいて「すべての競走相手を後方に引き離れた」メルセデスは、1902年と1903年の勝利以来、「全世界において手に入れようと求め」られ、「国際的な億万長者に数えられるものは誰でも、Cannstatt (メルセデスの生産地: 引用者注) の車をできるだけ早く手に入れるために、どんな金額でも支払う」ことになった¹⁵⁾。

Gordon-Bennett レースを伝えた記事は、次のように語っている。「ますます速くなっている自動車は、報道の本質を凌駕している。我々はセンセーショナルを必要とし、世界が何ももたらさないとすれば、我々は都合のいいようにそれを創り出さなければならない」¹⁶⁾。

Eisenberg によれば、「スポーツが18世紀にまでさかのぼる競争原理の伝統」を有したイギリスとは逆に、ドイツでは「遅れた精神性が経済的な所与性に適合することを、スポーツが加速化させたという意味において、スポーツは近代化の原動力となった」¹⁷⁾。その一つの証明としてあげられているのが英語の「record（記録）」概念の受容とドイツ語の「Leistung（業績・達成）」概念の変容である。すでに近代ドイツの体育思想に GutsMuths が定着させていた Leistung の概念を、Eisenberg は「競争モデルの拒否」とみなしている¹⁸⁾。GutsMuths は、生徒たちの Leistung の基準を「完成能力（Perfektibilität）」における自己目的的な計測として捉え、「良い鼓舞の方法」としての「進歩の認識」とみなした¹⁹⁾。生徒たちの Leistung への動機は、競争ではなく、記帳本（Protokollbuch）にもとづく個人の「避けえない試験」にあった。こうした Leistung の思想は、「18世紀から19世紀の展開期に、彼らの Leistung の市場価格から独立した、公的機関からの『支給』を得ようと努力していた、勤め人としての家庭教師、大学教授、政府の役人、将校」の思考様式を表現していた²⁰⁾。だが、そのような個人的な Leistung の一般化には困難が伴っていた。「個人の仕事」としての Leistung が「競争」や「社交」と結びつくことはなく、それゆえ社会化能力に欠け、さらに、制度的な枠組みをもたないギムナスティックの Leistung は、個人的なものにとどまらざるを得なかったのである²¹⁾。これに対して、競争を伴うスポーツの Leistung は、成功／失敗、勝利／敗北、上昇／下降を表現していた。正確な record は、個人の進歩だけではなく、「競争の結果」も示していた。大会や賭けへの参加、プロ・スポーツの市場との適合性を促すために、ある種の分かりやすさを生み出すことは、イギリスにおける record の重要な機能であった²²⁾。外来語として定着したドイツ語の Record は世紀転換期に社会的に流通するようになり、それに伴ってドイツ語の Leistung 概念も変容を被ることになる。1900年以降、言語フェライン（Sprachverein）の一般懸賞の公募によって「beste Leistung（最もよい成績）」が使用され、一般に「Höchstleistung（最高成績）」が認知され、「Weltsatz（世界記録）」という言葉が流行している²³⁾。1913年に

創刊された雑誌『Der Rekord』は、1955年に発行される『ギネスブック（Guinness Book of Records）』の発想を先取りするものとなる。ここでは「現代的文化の特徴的な表現」としてスポーツが取り上げられ、同時に、建築技術の最新の業績、穀類輸出の記録の数字が示され、株式相場と景気判断に関する情報が提供された²⁴⁾。

だが、近代的な経済原理に方向づけられたスポーツは、封建的なシンボルによっても捕捉されていた。この背反的な関係は、スポーツという新しい文化を受容することに必然的に伴ったドイツの困難さに起因するものであった。つまり、サッカー選手が自らを兵士とみなし、勝利を収めたチームが「勲章」によって表彰され²⁵⁾、テニスプレーヤーがラケットを「サーベル」に、テニス場を「決闘場」にたとえたように²⁶⁾、ドイツに以前から存在した封建的価値がシンボリックに付与されることで、スポーツはトゥルネンの国においても受容可能なものとなったのである。伝統的なシンボルがスポーツの受容にとって如何に重要な役割を果たしたかは、人気種目と不人気種目の対称的な参照によって理解される。例えば、戦争遊戯とみなされたサッカーが人気種目となったのに対して、女性的スポーツとみなされたホッケーは不人気種目にとどまった²⁷⁾。その大会がサーカスと捉えられ²⁸⁾、薄手のユニホームが下着とみなされた陸上競技に大衆化のきっかけを与えたのは、50km 超の「完全装備行軍」であった（図3）²⁹⁾。



図3 完全装備行軍のゴール 図4 競馬場での自転車レース

自転車競技と自動車レースは、伝統的な馬のステイタス・シンボルと結びついたために、素早く受容されている（図4）。1905年、自転車スポーツには、すでに40,000人超の愛好者が存在した³⁰⁾。高貴な自動車レースの一つの事例は、1908年から1911年にかけて開催された Heinrich 王子のレース大会（Prinz-Heinrich-Fahrt）である（図5）。皇帝自動車クラブ（Kaiserlichen Automobil-Club）とロンドン王家自動車クラブ（Royal Automobile Club）にのみ参加が許されたその大会は、

ドイツイギリス間を自動車で城から城へと旅をするツアーレースであった。例えば、バート・ホンブルクからスタートした1911年の大会では、「軽い食事をとるために、防衛力を誇る Braunfels 城に Solms 侯爵が参加者たちを招待」し、「侯爵と侯爵夫人が（中略：引用者）礼をつくして客人を迎えた」。さらに、「あらゆる旗が掲げられた牢固な Ehrenbreitstein 城」を通過した後で、「多様な礼装に身を包んだ学生たち」を含む数千人が歓迎するボンへとむかった。次の日、参加者たちは「侯爵の城で偉大な歓迎を準備している Ehrenberg 侯爵の客人」となり、近郊から集まった1,200人の農民たちによる民族的な催しによってもてなされた³¹⁾。この大会は、スポーツの競争が、如何にして封建的な（伝統的な）シンボル（皇帝—民衆の封建的關係）に新しい大衆的な（近代的な）有効性を与えることができたかを示す典型的な事例であろう。

ところが、こうした封建的なシンボルは、スポーツの大衆化によって、社会的なインフレーションを引き起こされる。例えば、ユニフォームである。Wilhelm II 世は、特定のスポーツクラブに、彼の寵愛を示すユニフォーム（Klubuniform）を授けていた。皇帝自動車クラブ、皇帝ヨットクラブ（Kaiserlichen Yacht-Club）、皇帝モーターヨットクラブ（Kaiserlichen Motoryacht-Club）、皇帝航空クラブ（Kaiserlichen Aero-Club）などである。ステイタス・シンボルであったはずの（スポーツにとどまらず、社会一般の）ユニフォームが軽蔑的に「大衆のシンボル」とみなされるようになることに³²⁾、それらのクラブの大衆化³³⁾が大きく貢献したのである³⁴⁾。皇帝によるスポーツの顕彰は、地方的な王家（Herrscherhaus）のレベルでも再生産された。1911年の陸上競技の年鑑によると、10の「諸侯と地方的な王家の賞」、11の「国家の賞」、30の「都市の賞」、40の「諸々の賞」が存在した。「諸々の賞」には「Asseburg 男爵の賞（DRAfOS 初代会長）」、「Carl Diem 紳士の賞」など、スポーツ専門職者による賞も含まれていた。スポーツ専門職者たちは、賞のリストの第一位に「皇帝の賞」を記載せず、ドイツ陸上競技スポーツ局が寄贈した「万国博覧会の賞」を記載するなど³⁵⁾、自らを皇帝直属の貴族と同等の位置においた。いわば、スポーツへの情熱を前に、賞の寄贈者の序列は瑣末なものになっていたのである。

こうした傾向は、ベルリンのグリューナウで亡くなった皇帝のために催された1897年の100年祭にもあらわれている。その祝祭の際に、スポーツ組織によって建てられた Wilhelm I 世の記念碑は、「皇帝 Wilhelm

記念碑」ではなく、「スポーツ記念碑」と呼ばれた。なぜなら、その建築費用を分担した組織は、記念碑の土台の周りに、組織の名前がついた「宣伝用の看板」を取りつけ、記念碑はその看板によって覆われてしまったからである（図6）³⁶⁾。重要なのは Wilhelm I 世への追悼や賞賛ではなかった。スポーツの力をみせつけるために、記念碑は利用されたのである。あるスポーツ大会の主催者は次のように告白している。商業的にスポーツ大会を成功させるためには、「他の要因（スポーツ以外の要因：引用者注）が必要となるに違いない。例えば、開催地までの共同での汽船旅行、グリューナウのスポーツ記念碑のもとでの愛国的な祝祭、競技会の終了後の夕方の祝祭的な賞の授与式と、それに続くダンスなどである」³⁷⁾。つまり、経済原理を獲得したスポーツ専門職者は、貴族的な称号から、すでに明確な距離を取っていたのである。1895年の『Sport im Bild』には、「諸侯がフルステンベルクを通り過ぎるとき、我々が脱帽したのは、諸侯の前であっただけでなく、特に素晴らしいエネルギーなスポーツマンの前だったからである」³⁸⁾と記されている。Diem も次のようなエピソードを紹介している。ボクシングの試合がおこなわれるスケート場において、プロイセンの Friedrich Karl 王子が練習に参加できるかを尋ねたときのことである。「彼（王子：引用者注）は恥ずかしそうに言った。『私はボクシングがしたい』。私は彼に着替えるように言い、私の同僚に指示を与えた。『彼を他の人間と同じように扱え。しかし Kirsch（彼は我々の最高のボクサーである）、もし君が王子を痛めつけたなら、君は完全に王家に煩わされることになる』。王子が登場し、殴りかかり、Kirsch は自らの腕で防御し、フェイントをかけたが、決して打ち込むことはなかった。彼は右のフックと左のアップーカットをもらった。そのとき、彼は突然ものすごい勢いで



図5 Heinrich 王子のレース大会



図6 広告に囲まれた記念碑

むかっけいき、力強いボクシングがはじまった。我々が闘いに望んでいたように、それはとても素晴らしく、そのときから王子はボクシングの同僚になった」³⁹⁾。

かくして、競争原理を内包するスポーツは、近代ドイツの市民階級－トゥルネン運動（Turnbewegung）－が19世紀のはじめに標榜しながらも、社会化させようとなく潰えてしまった理念を現実のものとした。つまり、イギリスから伝播してきたスポーツは、一方ではドイツ社会の封建的なシンボルをまとい、他方では新しい経済原理に適合しながら受容され、そうした逆説的な特徴をもつスポーツの「大衆化」が、封建的な社会の空洞化を促進させたのである。その一つの媒体がシンボルであったことも、その経過のなかで、兵役と上昇移動の経験をもつ、商人でありジャーナリストでありロビイストであったDiemが歴史の表舞台に登場したことも、近代オリンピック大会の隆盛が一つの頂点に達するとき（1936年）、単なる比喩以上の意味を獲得することになるのである。

3. 世紀転換期のドイツにおける「トゥルネン＝スポーツ」抗争の対立軸－シンボルとしての「身体」－

体操家によるスポーツ批判は、Wilhelm Angersteinが第14回ドイツ体操教師フェライン会議の講演において、トゥルネンを国民全体の文化、スポーツを特定階級の占有物と特徴づけ、スポーツと「道徳的真剣さをもって闘う」ように体操教師を鼓舞した1888年以降、激しい議論が展開されている⁴⁰⁾。Angersteinが「賞品」への情熱を槍玉にあげたように⁴¹⁾、経済原理との結びつきを剥き出しにしていた世紀転換期のスポーツは、体操家たちに「上流階級のもの」「貴族的なもの」とみなされ⁴²⁾、「精神的な労働のためにリフレッシュ」⁴³⁾を必要とするようなトレーニングは職業をもたない人々にのみ可能なものであり、スポーツの愛好家は、競争に導かれる「エゴイスティックな人間」と評された⁴⁴⁾。

この文化抗争はしかし、実際には市民階級の内部抗争という特徴を有していた。世紀転換期のドイツには、「スポーツ」を愛好する「近代派」の市民と、「体操」を信奉する「伝統派」の市民が存在していたのである。伝統派の体操家たちは、19世紀初頭のドイツの市民階級の形成期に発生し、市場から離れたツンプトの手工業者、国家職員、学者の日常世界に反映された徳目に固執していた。「その徳目に受け入れられた価値と行動規則、つまり、自主性、勤勉さ、Leistung（伝統的意味での：引用者注）、共同精神、慎み深さ、恒

久性、理性に共通していたのは、それらが貴族から距離をとることの意味を暗に含んでいたことである。これに対して、競争原理は、まだ重要なものとはみなされておらず、19世紀の経過のなかではじめて付け加わるものであった。市民的近代派、つまり銀行家、株式仲介人、経営者、エンジニア、ジャーナリスト、店員、セールスマン、その他の市場に方向づけられた職業のなかから、初期のスポーツ運動の社会的基盤の大部分が集められ、彼らがこの原理を自らのものとしたとき、それは伝統と結びついた多くの市民たちに『非市民的』とみなされ、それゆえ、『貴族的』とみなされたのである⁴⁵⁾。

例えば、平等原理は、体操家と同様、スポーツ愛好家にも受け入れられたが、体操家が「均質な市民階級」を理想とみなしていたのに対して、スポーツ愛好家はこの理念を以前から存在したイデオロギーであり、競争を個人の引き立て役と受け止めた⁴⁶⁾。同じように転覆的であったのは、新しいLeistung概念の強調であった。体操家にとって、Leistungが教師やフォアトゥルナーのもとでの義務として意味付与されていたのに対して、スポーツ愛好家は近代的な市場社会において一般的であったように、「主観的に労働と感じられるLeistungではなく、人々がLeistungをめぐる競争に参加しえることが重要だった」⁴⁷⁾。このLeistung概念の日常化とともに、スポーツはより多くの市民に受け入れられた。確かに、ドイツ体操連盟（Deutsche Turnerschaft：以下「DT」）の勢力は依然として強力であり、その拡大もまだ進行途上であった。しかし、スポーツの受容の中心地となった都市では、スポーツはトゥルンフェラインから加盟者を奪い、若い体操家のなかにはフェラインの活動中にスポーツをおこなうものさえみられるようになっていたのである⁴⁸⁾。体操家たちは、DTの内部にスポーツ部門を設立することを「必要不可欠の規則」と認識するようになる⁴⁹⁾。

体操家たちのスポーツ批判は、体操家が数十年以上の努力を続けてようやく獲得できた「政府からの承認」の獲得に、「高貴な領域」に支えられたスポーツが即座に成功したという経験にも媒介されていた。スポーツとは逆に、トゥルネンが「皇帝の賞」によって顕彰されることはなく、DTの大会に皇帝自らが臨席することもなかった⁵⁰⁾。社会的な承認の欠如が如何に彼らを苛立たせていたかは、体操家たちが1913年に「トゥルネンの価値について」の態度決定を、医者、自然科学者、作曲家らに迫ったことから明らかであろう⁵¹⁾。

DTはスポーツ・ジャーナリストとも友好的な関係を築けていなかった。その最大の原因は、スポーツ・ジャーナリストによるドイツ体操祭の取材をDTが禁止したことにあつた。禁止の理由は、「ドイツ体操術(Turnkunst)の今日の立場では、時事ニュースの特派員が、紳士の編集長でさえも、出来事の本質を正しく忠実に伝えることは不可能である」⁵²⁾と述べられている。こうした方針の問題点はしかし、体操家がトゥルネンの大衆化を求めていたにもかかわらず⁵³⁾、トゥルネンへの大衆の関心を喚起できないところにあつた。DTが自らの「事柄について一般大衆に正確に知らせる」という希望があるのなら、「どうぞご自分でやってください」と『Hamburger Nachrichten』の編集長は、DTの専属欄の創設という依頼に回答している。「出版に興味をもっていたのはDTであり、報道ではなかった」⁵⁴⁾のである。世紀転換期のスポーツが獲得していたような、カラフルなユニフォーム、最新のファッションに身を包んだ婦人、スターや有名人といったエンターテインメントを体操家たちが求めることもなかった⁵⁵⁾。確かに、祝祭的な催しの際には、トゥルネン場(Turnplätze)やトゥルネンの体育館(Turnhallen)も飾りつけられたが、商業主義的に脚色され、プロの舞台芸術家とデザイナーによって様式化されたスポーツ施設(図7)とは比べ物にならなかった。例えば、スケート場、自転車競技場、プールにはカフェやレストランが設置され、飲み物、煙草、新聞、花、スポーツ用品の販売所が備えつけられた。一部の施設には、読書室、婦人室、サロンが設置された⁵⁶⁾。「湿っぽい」「埃だらけ」という表現で伝えられていたトゥルネンの体育館を⁵⁷⁾、スポーツ・ジャーナリストたちはますます訪れなくなった。DTの自己表現は、広報活動の伝統的な形式である同人誌に制限されたままだったのである。

トゥルネンの自己表現に狭い境界が設定されていたことは、体操家とスポーツ愛好家の共同的な催しにもあらわれている。例えば、国家的な祝祭日には、スポーツ愛好家が効果的な演出によって注目的となった。その一つの例は、トゥルネンとスポーツ双方の中心地であつたハノーヴァーで開かれた1895年のセダン祭である。自転車フェラインが9月1日のセダン日の前夜に、色鮮やかでファンタジーにみちた、それゆえ大衆に好まれる形式で山車行列を催したのに対して、伝統的な手法に固執していた体操家たちは山車行列に参加しなかった。彼らは8月30日にすでに「まじめな祝祭(ernste Fest)」を開催し、9月2日の締めくくり



図7 Schönebergのベルリンスケート場

の松明行列に参加した。その際も、彼らはポートフェラインに主役を奪われている。「歩調の確かさ、コスチュームの清潔さ、態度の気骨さとたくましさ、この力強く、瑞々しい若者たちが夜会の英雄であつた」⁵⁸⁾。長い間、体操家に独占されてきたこの領域において、ポートフェラインの参加者にむけられた賞賛は、体操家の地位を貶めるものであつた。体操家が理想的な身体として掲げてきた平均的な身体が(図8)、いつの間にか時代遅れとみなされはじめていたことも偶然ではなかったのである。

「トゥルネン=スポーツ」抗争の決定的な一步を踏み出した Angerstein の講演はすでに、Michael Krüger が指摘するように⁵⁹⁾、既存の国家秩序を形成してきた「身体の規律・訓練」の崩壊への危機感にあふれていた。Angerstein は、バレエダンサーや曲芸師の「激情」が「非道徳的傾向を呼び覚ます」とき、そしてスポーツが「一面性」「やり過ぎ」「酷使」を呼び覚ますとき、「健康と身体的力量を同時に促進しながら、支配的道德と歩調」⁶⁰⁾をともしてきたトゥルネンの、すなわちドイツ国民の身体を形成してきた文化の、崩壊の危機を予感していたのである。無論、「言葉ではなく行動」⁶¹⁾に実行力があつたと言われるスポーツ愛好家の理論自体が脅威であつたというわけ

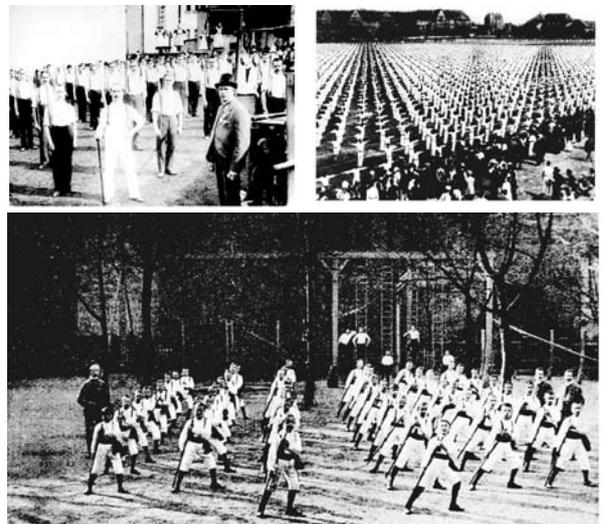


図8 体操家の「身体美」



図9 スポーツ愛好家の身体美を伝える雑誌



図10 スポーツ愛好家の「身体美」

ではない。むしろ、その影響力は、「行動の男」たちの「身体」そのものにあった。彼らの近代的な「身体の美学」は、Angersteinが危惧したように、体操家のそれとは全く異質なものであり、それは男たちの身体によって表現され、シンボリックに伝達され

ていったのである。例えば、「美」すら競争の対象としたスポーツは、身体に美しさを要求した。企業による宣伝広告とともに、多数のスポーツ雑誌によってその使用が宣伝されたダンベルやエキスパンダーなどを使って、彼らは「理想的な身体のかたち」と「理性的な身体規律（vernünftige Leibeszuht）」を手に入れようと努力した⁶²⁾。1913年には、500,000個もの「Sandow-Hanteln（ダンベルのこと。ボディビルディングのパイオニア Eugen Sandow の名に由来）」が使用され⁶³⁾、スポーツ専門誌には筋肉の測定値とともに身体美を誇る写真が掲載された（図9）。医者、彫刻家、画家などが審査員をつとめた「身体のかたちのコンテスト（Körperformen-Wettbewerbe）」と「男の美の競争（Konkurrenzen in Männerschönheit）」が一記録をもつ多くの走者の参加のもと一陸上競技大会やベルリンのスポーツ沐浴場（Licht-Luft-Sportbad）で開催された（図10）⁶⁴⁾。

このボディビルディングの初期の盛況を支えた先駆者はスポーツ医学のパイオニアたちであった。彼らのなかには、「電気光線浴療法（今日の日焼けマシン）」⁶⁵⁾の考案者・化学者・経営者であり、そしてドイツ・オリンピック運動の創始者となる Willibald Gebhardt も含まれていた。「遊戯運動」以来、「トゥルネン＝スポーツ」抗争に大きな影響を与えた「衛生学的議論」や「屋内／屋外をめぐる議論」は、一つの帰結として、「光と空気」のもとでの「健康」という発想をもたらし⁶⁶⁾、そうした背景のもと、スポーツ沐浴場がベルリンの人々を魅了し、Gebhardt の「電気光線浴療法」が受け入れられたのである。スポーツ医学のパイオニアたちによって使用された人体の測定器具、エルゴグラフ、心電図、レントゲンも、1911年のドレスデンの衛生学展示会「スポーツ衛生学—科学部門」で披露されている⁶⁷⁾。このスポーツ医学の発展もまた、DTにとっては都合の悪いものであった。もし科学的な権威者たちがアルコールの放棄を呼びかけるために、新しい身体的な理想像を提示し、同時に、体操家がスポーツ愛好家よりも多くのアルコールを消費する習慣があるという調査結果が公表されたならば⁶⁸⁾、それは体操家のフェライン生活に付随していた居酒屋文化（Kneipenkultur）への攻撃を意味していたからである。DTの会長 Ferdinand Goetz は、ドイツ体操祭においては「トゥルネンの Leistung よりも、ビールを飲むという真の世界記録である Leistung」が獲得されると講演をした衛生学者 Ferdinand Hueppe（スポーツ沐浴場の支援者）を「殴りたい」とまで言い放っている⁶⁹⁾。

スポーツが、トゥルネンとはまったく異なる身体を求めることは、すでに当時のスポーツ愛好家にも自覚されていた。1898年の『Sport im Bild』には、トゥルネンをしている「商売を営む人々や手工業者たちなど」は「規格どおりの人間、均一化された人間の実現を要求する職業の人々であり、いずれの変則的な発達をも避けようとする人々である」と述べられている。「スポーツマン (Sportsmen)」は、それに対して、「主に精神的な職業活動によって」特徴づけられる人々であり、まったく異なる欲求をもっている。「短時間に、非常に大きな Leistung を求め、対戦相手に苦痛を与える、純粹に身体的な発達他に、精神的な戦術、決然とした態度、研ぎ澄まされた目、戦いにおける騎士道精神 (Ritterlichkeit) の鋭い発達をより多く求めるのである」。「教養人、芸術家、商人」にとって、これはまさに「計り知れない価値」がある性質である。彼らは、それらの性質に「非常に多くの成功」を負っており、「この理由からスポーツの旗のもとに常に新しい大衆が集まっているのである」⁷⁰⁾。

スポーツ愛好家の新しい「身体の美学」は、個人の「意志」と「Leistung の能力 (Leistungsfähigkeit)」による身体支配を表現するものであった。ポプスレーのチャンピオン (Meister) は、「彼の神経」に対するのと同じように、「自らの身体の絶対的な支配者」になると述べている⁷¹⁾。位階構造的な社会関係にもとづいていたトゥルネンは、この「身体の自己支配」を獲得できなかった。体操家には、フォアトゥルナーに媒介された規則に従属することが要求されていたのである⁷²⁾。DT の競技規則は、記録に方向づけられたものではなく、トゥルネンの共同体の平均的水準に方向づけられていた⁷³⁾。多種目競技での Leistung は、個別の運動の一面的な最高の達成よりも価値があるものであった。特定の記録の境界を超えても、それは Leistung の価値を達成したことにはならなかった。「美しい姿勢」の評価は例えば、着地の際の転倒によって、トゥルネンの枠内でおこなわれていた幅跳びの結果が無効にされるという結果をもたらした⁷⁴⁾。国民道徳の形成を目指したトゥルネンは、「共同体的身体 (Gemeinkörper)」⁷⁵⁾ を追求し、スポーツのような「記録の Leistung (Rekordleistungen)」や「個人の Leistung (Einzelleistungen)」ではなく、「全員の身体的な教育」を目標としていたのである⁷⁶⁾。

スポーツは、自己の主導権を発揮するだけでなく、身体の可能性と限界を計測し、その精神力を試す体験領域でもあった。もし精神が「今にも衰弱しそうで

あったならば、意志が精神を支える」と、当時の50m走の記録保持者であり、スポーツ沐浴場の活動に参加した経験をもつ、スポーツ・ジャーナリストの草分け Kurt Doerry⁷⁷⁾ が述べている。まさに「極限のエネルギーの供給を身体に求める努力 (中略：引用者) それ勝利を保証する」⁷⁸⁾。100回の失敗が、陸上競技選手に、たった一度の成功の喜びをもたらし、ボート選手は「ビール、ワイン、煙草という楽しみを堅く禁じ」、騎手はトレーニングによる「身体的な準備」のために「厳しいダイエット」に励むのである⁷⁹⁾。これと同じ確証をもっていた Diem は、体操家による「やり過ぎ」と「酷使」というスポーツ批判に情熱的に反論している⁸⁰⁾。「我々は告白する。戦いにおいて、がっしりした体格の、勇気ある高潔な考えを発達させた男だけが、進歩的な文化の担い手となりえるのである。つまり、健康な身体だけでなく、支配している意志と、喜びに満ちた精神と結びついた鍛えられた身体、よく整えられた高貴な精神によって制御される鍛えられた身体、それが我々に、暗闇から明るみへとおし進む世代、溢れんばかりの豊かさにおいて偉大なものを生み出そうと常に努力する世代をもたらすのである。(中略：引用者) 偉大な意志なしに、この世界に偉大なものは何一つ存在しない！」⁸¹⁾。

DT だけではなく、労働者体操連盟 (Arbeiter-Turnerbund) にあっても、「身体的な劣勢」「身体的な欠陥」「技術の欠如」へのスポーツ愛好家の配慮の無さが、スポーツ批判の一つの論拠となっていた⁸²⁾。しかしながら、その体操家も、1908年には『トゥルネンと美』と題された雑誌記事のなかで、次のように主張している。「正規のトゥルネンが良く発育した人間の身体の自然な美を高めることは、我々のドイツのトゥルネンを知っているものにとっては明白なことである。それにもかかわらず、自らトゥルネンをしたことのない多くの芸術批評家と医者たちは、ドイツ体操術が身体をゆがめ、醜いものにするという批判を唱えている。これらの方々に、我々は、最大の敬意をもって、次の写真 (図11：引用者注) をしっかりと観察してもらおうように懇請する。彼ら二人は有名なベルリンの体操家である。彼らは、保養地であるグルーネヴァルトのアイヒカンブにおいて開催された、身体文化にかかわるフェラインの競争で、多くの参加者たちのもと、最高に形成された身体をもつものとして勝利した二人である」⁸³⁾。この体操家の主張に示されているように、「行動の男」と呼ばれたスポーツ愛好家の「身体の美学」は、体操家たちの理想を凌駕し、世紀転換期

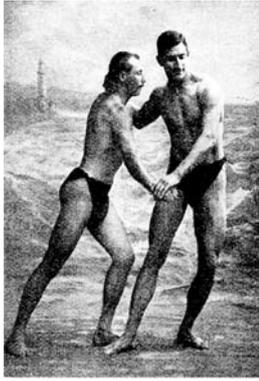


図11 「身体のかたちのコンテスト」に勝利した体操家

の「身体の理想像」を塗り替えはじめていたのである。DTはロンドン・オリンピック大会への参加に際して、最低でも「1.72mの身長があること」を選考基準として明示することになる⁸⁴。この転覆は、Angersteinが恐れたように、まさに、「身体の規律・訓練」の一つの装置の崩壊（正確には「変容」）を意味すると同時に、その危惧をも超えて、新しい「身体の規律・訓練」の時代の幕開けを意味していたのである。

4. 近代オリンピック大会（1896-1916年）への参加と「身体の規律・訓練」の変容

近代オリンピック大会への参加をめぐるドイツ国内組織の動向は、成田十次郎、Arnd Krüger、Karl Lennartz、Eisenbergらによって報告されている⁸⁵。その過程を「社会」と「文化」、「身体」と「シンボル」の視点から再読するとき、世紀転換期の「トゥルネン＝スポーツ」抗争には如何なる意味が付与され、如何なる「身体の規律・訓練」が見出されることになるのだろうか。

世紀転換期のドイツにおいて、特定の支持基盤をもたない国民自由党の代表者たちは、自らの構成集団である市民階級に主導されたトゥルネン運動を高く評価していた。国民自由党はさらに、1890年代以降、全ドイツ連盟（Alldeutschen Verband）をはじめとする全国規模での各連盟にも党員を配置する⁸⁶。こうした背景のもと、社会主義者鎮圧法の失効直後の1891年5月、国民自由党の役員 Emil von Schenkendorff が⁸⁷、文部大臣 Gustav von Goßler の提案に応え、民族・青少年遊戯振興中央委員会（Zentralausschuß zur Förderung der Volks- und Jugendspiele：以下「ZA」）を設立したのである（DTの役員も含め、35人の創設メンバーのほとんどが国民自由党に所属⁸⁸）。

ZAは自らの立場をトゥルネンとスポーツの中間に

おき、その活動の対象を「遊戯」と表現した。競技会を支持していたZAにも、トゥルネン批判者とスポーツ批判者の両方が含まれていたのである⁸⁹。その活動は、ドイツ遊戯と国民的文化の研究、出版活動（ルールの翻訳など）、実践的施策（練兵場・公園など遊戯場の自由化、医者・文献学者・体操教師の会議の開催、衛生学の展示会、セダン祭でのボール遊戯と民族遊戯の実施、遊戯教師養成コースの開設）に及んだ。ZAの「遊戯運動」の理念はしかし、すでにパブリック・スクールの模範像からは遠く離れていた。Goßlerは青少年遊戯の目的を学生組合の決闘からの方向転換と説明し⁹⁰、「強力な世代」を要求する1890年の Wilhelm II 世の布告に応えるために、ZAは「教育による軍事力」の標語のもと、徒歩旅行（Wanderungen）や自然体験を宣伝した。「教育による軍事力」のための方策は、従順さや勇気といった「市民的な徳」とともに、「身体的な努力に耐える能力」を形成しようとするものであった⁹¹。こうして、ZAの青少年遊戯は、青少年を社会民主主義から遠ざけようとしていた国民自由党の理念と強力に結びついていくことになる⁹²。

1895年、ZAは、急速な工業化・都市化・階級分割・娯楽の多様化などによる共同体的な紐帯の弛緩を背景に、「国民大衆（Volksmasse）」や「公衆（Publikum）」を対象とする「ドイツ国民祭（Deutschen Nationalfest）」を企画する⁹³。この国民の統合を目指す国民祭は、セダン祭とドイツ体操祭の改革、そして「屋外での健康」という理念とも結びつけられた⁹⁴。DTの会長 Goetz は、ドイツ体操祭との競合関係を意識し、DTによる支援を禁止した⁹⁵。これに対して、Schenkendorff は、1897年に独立した委員会の設立を呼びかけ、政治家、経済人、軍部から86人の参加者を獲得し、その委員会を「ドイツ国民祭のための帝国委員会」と名づけている⁹⁶。全ドイツ連盟も国民祭の計画を支持し、「全ドイツ委員会（Alldeutschen Ausschuß）」を創設する⁹⁷。さらに国民祭は、国際主義を掲げていた Pierre de Coubertin の近代オリンピック大会とも対抗的な位置におかれ、「ドイツ国民オリンピック（Deutsch-nationles Olympia：Nationaldeutsches Olympia）」と呼ばれた⁹⁸。1900年の開催にむけて計画された国民祭では、スポーツだけではなく、トゥルネンも実演され、3年間隔で常に同じ「祖國的」な場所で開催される予定になっていた。そのためスタジアムの建設候補地には、国民的記念碑を有する郊外－健康上の理由から大都市が敬遠され－の都市、すなわち、市庁舎があるキフホイザー、民族会戦記念

碑があるライプチヒ、ニーダーヴァルト記念碑があるルデスハイムがあげられ、1898年にニーダーヴァルト記念碑のルデスハイムに決定されている⁹⁹⁾。しかし、結局のところ、財政的な困難さとDTとZAの対立のために、国民祭は実現されなかった。Uerke E. Hamerが指摘するように、国民の統合を企てた国民祭の構想は、逆説的にも、DTとZAの分裂を導くという結果に終わったのである¹⁰⁰⁾。

同じ時期（1895年9月21日）、ベルリン駐在のギリシア大使 Kleon Rangabe と交流のあった Gebhardt は¹⁰¹⁾、近代オリンピック大会への参加を目指して「スポーツ・遊戯・トゥルネンのドイツ連盟（Deutschen Bundes für Sport, Spiel und Turnen）」を創設し、政治・経済領域からの支援を獲得するために、ユニオン・クラブ（Union Klub）¹⁰²⁾の11人を招集し¹⁰³⁾、植民地政治家と呼ばれた Carl Peters を役員に配置した¹⁰⁴⁾。しかしながら、全ドイツ連盟の共同創設者でもあった Peters が諸スポーツ連盟を全ドイツ連盟の地方支部にしようとしたために、オリンピック運動は不評を買い¹⁰⁵⁾、さらに国民祭に参加していた全ドイツ連盟が近代オリンピック大会を「フランス人の企画」として拒否してしまう¹⁰⁶⁾。DTとZAのどちらからも支持を得られなかった Gebhardt は¹⁰⁷⁾、結局、Peters と決別し、連盟から脱退する道を選ぶ。その後も Gebhardt は「個人的」にオリンピック大会への参加に固執し続けた¹⁰⁸⁾。Gebhardt がオリンピック大会への参加にこだわった理由が、どの程度、自らのスポーツ経験や理念に裏付けされたものであったかは判然としないが、その理由の一つが彼の職業的なメリットにあったことは疑いない¹⁰⁹⁾。「電気光線浴療法」に従事していた Gebhardt は、人生の課題を「人間の生体にとっての物理学的な諸力の意味を徹底的に追求しようとする、素晴らしい科学に従事すること」に見出し、「人間のしつけに貢献（Menschenzucht）」する「身体測定の研究所」の設立を目指していた¹¹⁰⁾。「沐浴（bains d'air : Luftbäder）」を近代的な生活の重要な要素とみなしていた Coubertin は、Gebhardt にとって、自らの職業的興味と重なる理念をもつ人物でもあったのである¹¹¹⁾。

Gebhardt が新たにオリンピック参加委員会（Das Komitee für die Teilnahme Deutschlands an den Olympischen Spielen zu Athen）を創設したとき、彼は先の失敗に学び、市民的な政治との接触を避け、オリンピック参加委員会を高位な貴族で飾りつけた¹¹²⁾。Gebhardt は1896年1月7日に Hohenlohe-Schilling 侯爵 Choldwig と接見し、ギリシア王家と皇帝による支援

の約束を取りつけ、Philipp Ernst 皇太子がオリンピック参加委員会に派遣されることになる。これによって、近代オリンピック大会への選手派遣のための条件が整えられ、DTの明確な禁止にもかかわらず、体操家たちが近代オリンピック大会に参加することになったのである。第1回アテネ大会に参加した選手団（Doerryも陸上競技選手として参加）は、「ベルリンの粗野なトゥルネンの班」という Goetz の言葉に代表されるように、国内組織から厳しく批判された。その選手団の象徴的な存在が1933年に「ユダヤ人排斥条項」によってDTから除名され、1942年に強制収用所で処刑される Alfred Flatow であった¹¹³⁾。

Gebhardt は、パリ大会（1900年）とセントルイス大会（1904年）への参加にも成功し、1907年にはDTの「儀礼代表」の派遣が決定され、1914年に万国博覧会所轄の帝国委員 Theodor Lewald によってドイツでのオリンピック大会開催のための予算請求が議会に提出されるまでに至る¹¹⁴⁾。しかしながら、1905年にオリンピック参加委員会の会長職を引き継いだ Egbert von der Asseburg 伯爵によって Gebhardt は更迭され、失意のうちに1921年に交通事故で死亡し、その後、忘却されてしまう。Gebhardt の失脚は、一つには彼の職業的な失敗にその原因があった¹¹⁵⁾。しかし、決定的であったのは、皇帝とユニオン・クラブが互いの関係を改善するために、新しい仲介役として退役軍人 Asseburg を必要としたことであった¹¹⁶⁾。

ユニオン・クラブの一員でもあった Asseburg がオリンピック参加委員会の会長に就任した後、オリンピック運動は一つの高揚を迎え、1905年に DRAfOS へと改称される。DRAfOS の規約によれば、DRAfOS は「国際」オリンピック大会に制限されることなく、将来を見通した利益の拡大に取り組む組織であり、国民オリンピックの計画も念頭におかれていた。そのために DRAfOS は、DT、ZA、諸スポーツ連盟、青年ドイツ同盟（Jungdeutschlandbundes）などを自らのもとに統合しようとしたのである¹¹⁷⁾。DRAfOS の当面の課題は、Asseburg の計画によるグルーネヴァルトのドイツ・スタジアム建設のために資金を調達することであった。公的機関、軍部、大企業の後援にもかかわらず、十分な補助金が調達できず、建設の開始は遅滞した。結局のところ、ユニオン・クラブの調達資金によって局面が打開され、スタジアムは DRAfOS とユニオン・クラブの合弁企業となる。Wilhelm II 世の名前が刻まれたトンネルで駅へとつながれたスタジアムには、サッカー場、陸上トラック、自転車

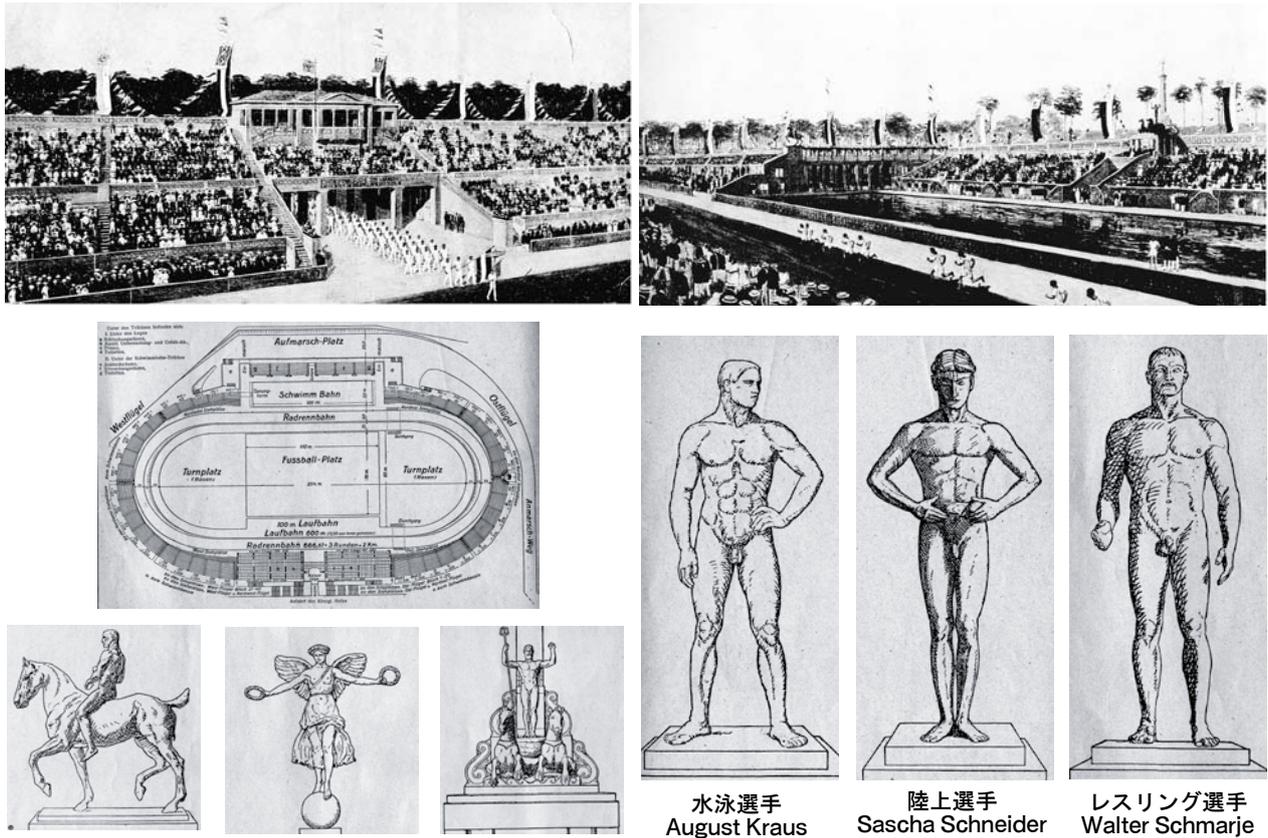


図12 ドイツ・スタジアム

コース、観客席付プール（3000人収容）、トゥルネン場、約27,000人収容の客席（26,910人）、衛生設備（医者による選手の身体測定の一部屋も計画された）、電話設備付のプレスルームなどが備えつけられた。さらに、Diem が Ludwig Curtius を参照しながら「身体の規律（körperliche Zucht）」と呼んだ、スポーツ愛好家の身体美を称える彫刻（それらの彫刻には「水泳選手」や「陸上競技選手」などの作品名が掲げられた）とともに、古代ギリシアの神話をモチーフにした彫刻が飾りつけられ、ドイツ・スタジアムは「国民芸術の場」となり（図12）¹¹⁸⁾、1916年のベルリン大会のための準備が整えられたのである¹¹⁹⁾。このスタジアムに関して、Diem は次のように表現している。「ギリシアにおいては、Curtius が言うように、宗教こそ彼らの芸術が根ざす大地であった。ゼウス神殿と創造された芸術作品が美的に飾りつけられたスタジアムに示された根本思想は、Zeus（ギリシア神話の最高神：引用者）の後見のもとでの戦いと勝利であった。我々のもとでは、Goethe の言葉の通り、青少年が科学と芸術を手にするとき、彼らは宗教を堅持し続けるだろう。スタジアムは、なかでも芸術を、ドイツ芸術を、青少年に媒介することができるのだ」¹²⁰⁾。

1913年6月8日、「ドイツ・スタジアムの落成式典（Stadionweihe）」（図13）が Wilhelm II 世の王位25周年記念祭の日に3万人の参加者（観衆2万人）を集めて開催された。DRAFOS の会長 Podbielski はプロイセンの王室の勤務勲章によって顕彰され、スタジアムの記念銘板と Podbielski-オークの命名式によって70歳の誕生日に名誉がそえられた¹²¹⁾。スタジアムの落成に先立って、「解放戦争」の100年記念祭での伝統的な役割のために DT も顕彰された。DRAFOS は、「連帯感の覚醒」と「道徳的な育成の促進」という標語のもと、ベルリン大会の「前座（Vorspiele）」（1914年）と

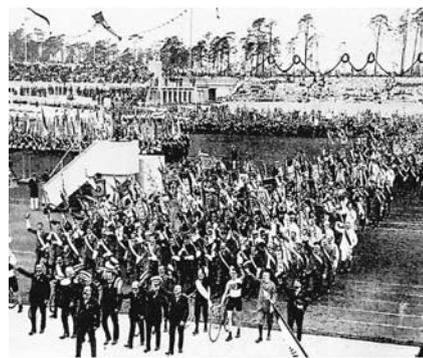


図13 ドイツ・スタジアムの落成式典

「国民オリンピック」(1915年)のための予行演習を企画し、これとの関連でDTにも特別な実演を約束した。ベルリン大会においても「競技週間 (Spielwoche)」においてZAは青少年遊戯を、DTはトゥルネンの棒運動 (Stabübungen) と秩序運動 (Ordnungsübungen) をデモンストレーションすることになり、それに続く「スタジアム週間 (Stadionwoche)」において、青年ドイツ同盟の各組織が「戦争遊戯、野営訓練、命令遵守訓練、救助訓練」を実演することになった¹²²⁾。

この自己表現の機会と国際報道を前に、DTとZAはスポーツへの批判を控えるようになる。DRAFOSは、トゥルネン、スポーツ、遊戯、準軍事的訓練の総合概念として「身体運動 (Leibesübungen)」という概念を好んで使用した¹²³⁾。1907年にはDTのオリンピックへの選手派遣が決定されている¹²⁴⁾。しかしまだ、この時期のトゥルネンとスポーツの停戦はDTによって頻繁に破られた。例えば、競争をともなわないトゥルネンが1908年のロンドン大会で評価されなかったことを契機に、DTの役員たちは1912年のストックホルム大会に体操家を派遣しなかった¹²⁵⁾。しかしそれでも、DTは「スタジアムの落成式典」に加盟者のほとんどを参加させている。その時の様子は、「彼らの年齢の完全な力」をもった若い人々だけが「ユニフォームに身体を包んでその場所」を満たしたのではなく、「白髪の男性、ほとんど老人に近い人、眼鏡をかけた人、彼らもスポーツウェアに身体を包んで」、近衛団体の音楽にあわせて「彼らの皇帝」の目の前を行進したと伝えられている¹²⁶⁾。「スタジアムの落成式典」に姿をあらわした皇帝の護符のもと、新旧両派の市民階級 (トゥルネンとスポーツ) はどちらも衝突を回避し、「スタジアムの落成式典」というシンボリックな儀式的なかで、「身体運動」の名のもとに統合されたのである。開会セレモニーでは、10,000羽の伝書鳩とともに、各連盟の参加者たちが皇帝夫妻に敬礼し¹²⁷⁾、軍部もアルバトロス複葉機で上空旋回するという演出によってセレモニーに加わった¹²⁸⁾。Eisenbergは、民族共同体における紛争の止揚への願いは、市民階級にのみ認識可能だったわけではないと言う。もし労働者体操連盟に「スタジアムの落成式典」への参加依頼があったならば、労働者体操連盟も、オリンピック運動の列に加わっていたかも知れない、と言うのである。労働者トゥルンフェラインの参加を当局が妨害したために、ベルリン大会の支援を社会民主党が拒否した1914年の帝国議会の議論において、社会民主党の議員たちは、「ある政府筋」が「スタジアムの落成式典」

への参加を妨害したことに遺憾の意を表明し、議員の一人は、「文化作品の支援に反対する立場を我々が強制されている状況におかれているのは残念なことである」と述べている¹²⁹⁾。つまり、Diemが回顧しているように、階級や学歴の違い、文民と軍人の違いを超えて、スポーツは本物の「ドイツの文化として受け入れ」られたのである¹³⁰⁾。例えば、Elisabeth Fehrenbachは、当時のドイツ社会における皇帝の位置づけを次のように表現している。「いわゆる個人的支配の正当化は皇帝の合憲的な立場にあつたわけではなく、色あせた憲法上の君主よりも、より輝かしく生き生きとした力強い指導者の人格を体現しているかのように映っていた、国民の皇帝に対する観念の感情的な効力によって正当化されていたのである。その点では、Wilhelm II世は、国民国家のシンボルとしての帝制と、帝国の制限のない指導機関をもはや区別していなかったのである。国家の代表者となり、Wilhelm II世は、政治の領域においてだけではなく、『国民生活』のあらゆる領域における彼の時代のスポークスマンとしてその外見に配慮した。(中略) 皇帝のシンボルは、もはや帝国の政治的な統一だけではなく、それを超えて、『国民の精神的な全人格』(Friedrich Meinecke)を体現していたのである¹³¹⁾。スタジアムの落成式典は、まさに近代的な「意志の文化」の恩恵を与える、大衆に影響力をもつ人物、すなわち「国民の精神的な全人格」として皇帝を描き出すことで、皇帝の言葉の通り、「ドイツに党派は存在せず、ドイツ人だけが存在する」ようになることに大きく貢献したのである¹³²⁾。

この時期には、素朴な国際主義も消え去り、国家主義が大きな意味を獲得していた¹³³⁾。ジャーナリストによるメダル獲得表がこの傾向を支えた¹³⁴⁾。帝国首相 Theobald von Bethmann Hollweg は、1912年のストックホルム大会の報告書を読んだとき、近代オリンピック大会が「国家意識と国家の誇り」を「呼び覚まし」そして「強くする」ことに相応しいものであるという文言に同意している¹³⁵⁾。ドイツ国民を一つにするというドイツ国民オリンピックの願望を、国際主義を掲げていた近代オリンピック大会が実現させたことも、歴史の逆説というほかない。

そのストックホルム大会の報告書を作成した、軍事作家であり、スポーツ作家であり、Diemの陸上競技仲間の一でもあった、退役軍人 Franz von Reichenau と、「司令官 (General)」¹³⁶⁾ と呼ばれた市民的な DRAFOS 役員の Diem は、全く別の方向から、スポーツと軍部の接続に貢献している。スポーツへの直接的

な軍事介入の意図を隠さなかった Reichenau は¹³⁷⁾、スポーツは「身体的な Leistung 能力を根本的に高め、同時に、戦争のために必要な道徳的な性格を呼び覚ます」のであるから、軍部はスポーツに強い関心をもたなければならない、と主張した¹³⁸⁾。一方、Diem は、スポーツと軍隊の Leistung 原理のアナロジーを繰り返して強調し、陸上競技連盟は、1913年に一年志願兵の資格を付与する高校卒業証明書の授与を「身体運動」の試験と結びつけようと試みた¹³⁹⁾。これによって、軍部による市民社会への直接的な介入の可能性が開かれたのである。つまり、Reichenau の軍事介入の主張は、スポーツ専門職者・愛好家としての情熱から「身体運動」の有用性を強調し、その制度的充実を求めた Diem の主張と接続することで¹⁴⁰⁾、大衆を戦力とみなす、「近代的な世界戦争」のための軍備構想の下地を形成することになったのである¹⁴¹⁾。もちろん、スポーツ・ジャーナリストによって活字化されたスポーツと戦争のアナロジーも効果的であった。しかし、国家主義の強調と同じく、スポーツと戦争のアナロジカルな表現は、当時においても目新しいものではなかった¹⁴²⁾。むしろ、自国でのオリンピック大会の開催を前に、1913年以来、「トゥルネン＝スポーツ」抗争の停戦地点としての「身体運動」が「国民のシンボル」として様式化され、まさに「近代的な世界戦争」に相応しい、「身体の自己支配」を模範とする「身体の規律・訓練」の要件が整えられたこと、ここに世紀転換期のドイツにおける「文化」抗争の「社会」的な終着点があったのである。

5. おわりに

以上のように、「トゥルネン＝スポーツ」抗争は「大衆」の「身体」を一つの対立軸として争われ、近代オリンピック大会への参加を一つの契機としながら、「身体運動」という結節点において、広範な「大衆の国民化」に貢献しうる、「身体の規律・訓練」に逢着したのである。つまり、封建社会の空洞化に貢献したスポーツも、近代オリンピック大会への参加をめぐる、雑誌（マス・メディア）、スタジアム（芸術的様式）、皇帝、そしてスポーツ愛好家の身体にシンボリックに媒介されながら、自己支配（意志）・医学（衛生学）・競争（記録）・国家などを特徴とする新しい「身体の規律・訓練」の装置として準備され、広範な「大衆の国民化」へとむけて稼動し始めることになったのである。

この「身体の規律・訓練」にみられる権力作用は、

近代オリンピック大会が未曾有のスペクタクルへと発展する1936年のベルリン大会において一つのクライマックスを迎える。ディームを中心とするスポーツ界が如何にしてその頂へと登りつめていくのか、ここに「トゥルネン＝スポーツ」抗争を「身体」の視点から検討しようとする、本研究の次なる課題が残されている。

本研究は平成20年度科学研究費・若手研究（B）課題番号18700502の研究成果の一部である。

謝辞

資料収集にあたっては、弘前大学図書館学術情報部の小石川菜生子さん、日本体育大学の波多腰克晃助手、ケルンスポーツ大学の西村友宏さん、トリノ大学の Frau Julia Ann-Christin Prange の各氏に多大なご助力を頂いた。記して感謝の念を申し添えておきたい。

注及び文献

- 1) Christiane Eisenberg. *Englisch Sports und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939*. Paderborn/München/Wien/Zürich. 1999. S.58. S.432-433. 経済原理をゼロ・サム・ゲーム（富の奪い合い）とみる重商主義に対して、啓蒙主義時代のイギリスには「互いの利益を増大させ合う」という「商業（commerce）」概念が生まれている。Albert Hirschman はこれを「ドゥ・コメルス（doux commerce）」と名づけた。英訳は「gentle and soft commerce」。重商主義が「不公平」「不平等」「国家」という特徴をもつものに対して、「ドゥ・コメルス」は「協調」「平等」「コスモポリタン」を促進させるもの。
- 2) 同上, S.218.
- 3) 同上, S.182-185. S.194-198.
- 4) Adolf Schulze. *Radfahren*. in: Richard Nordhausen(Hg.). *Sport und Körperpflege*. Leipzig. 1910. S.580.
- 5) Eisenberg, *Englisch Sports*, S.219-220.
- 6) Paul Weber. *Entwicklungslinien der Sportberichterstattung in der deutschen Tagespresse*. in: *Zeitungswissenschaft*. 11. 1936. Nr.7/8. S.305-308. Rupprecht Wilhelmine. *Die Entwicklung der Sportzeitung in den Münchner Neuesten Nachrichten von 1848 bis 1914*. München. 1936. S.30-31.
- 7) Diem はそのときの経験を「恍惚の経験」として語ったと伝えられている。Achim Laude/Wolfgang Bausch. *Der Sport-Führer. Die Legende um Carl Diem*. Verlag die Werkstatt. Göttingen. 2000. S.7.
- 8) Rolf Engelsing. *Massenpublikum und Journalistentum im*

19. Jahrhundert in Nordwestdeutschland. Berlin. 1966. S.229.
- ⁹⁾ Carl Diem. Ein Leben für den Sport. Ratingen. o.J. 1974. S.49-50. Carl-Diem-Institut. Dokumente zum Aufbau des deutschen Sports. Das Wirken von Carl Diem(1882-1962). Sankt Augustin. 1984. S.9, 66.
- ¹⁰⁾ Laude/Bausch, Der Sport-Führer, S.19-20.
- ¹¹⁾ 加藤元和. カール・ディームの生涯と体育思想. 不昧堂. 1985. p.30.
- ¹²⁾ Carl-Diem-Institut, Dokumente zum Aufbau, S.78-79.
- ¹³⁾ A. v. Wartenberg. Praktische Ehrenpreise. in: Sport im Bild. Nr.16. 1907. S.452.
- ¹⁴⁾ Thaddäus Robl. Der Radrennsport. Leipzig. 1905. S.151. Rudolf Lerch. “Das Fahrrad und seine Bedeutung für die Volkswirtschaft im Deutschen Reich. Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich. 24. 1900. S.333.
- ¹⁵⁾ Gustav Braunbeck. Automobilsport und Geselligkeit. Zum 20 Jährigen Bestehen des “Allg. Schnauferl-Clubs” und des “Schnauferl- Buches”, in: Motor. Juli/August. 1920. S.152. Walter Umminger. Die Chronik des Sports. Dortmund. 1992. S.199. S.211.
- ¹⁶⁾ Hans-Jürgen. Schneider. 125 Jahre Opel. Autos und Technik. Köln. 1987. S.32. 記事にはアメリカ皇帝の言葉と記されている。
- ¹⁷⁾ Eisneberg, Englisch Sports, S.231.
- ¹⁸⁾ 同上, S.102.
- ¹⁹⁾ GutsMuths Johann Christoph Friedrich. Gymnastik für die Jugend. 2.Auflag. Schnepfenthal. 1804. S.192-193. S.520.
- ²⁰⁾ Eisneberg, Englisch Sports, S.104.
- ²¹⁾ 同上, S.104.
- ²²⁾ 同上, S.102.
- ²³⁾ 同上, S.36-37.
- ²⁴⁾ “Was wir wollen” . in: Der Rekord. Nr.1. 1.5.1913. S.1.
- ²⁵⁾ Eisneberg, Englisch Sports, S.186-187. S.191-192.
- ²⁶⁾ 同 上, S.206. Robert Hessen. Sport oder Alkohol ? in: Preußische Jahrbücher. 103/1. 1901. S.240. Ferdinand Hueppe. Über die Spielbewegung in Deutschland und die Entstehung des Deutschen Fußball-Bundes. in: Die Leibesübung. 2. 1926. S.271.
- ²⁷⁾ Hans D. Simon. Hockey. in: Carl Diem(Hg.). Sport-Brevier. Berlin. 1921. S.140.
- ²⁸⁾ Eisneberg, Englisch Sports, S.160. Der englisch-amerikanische Fußballclub in Dresden. in: Illustrierte Zeitung. Leipzig. 25.4.1874. S.311.
- ²⁹⁾ Hajo Bernett. Leichtathletik im geschichtlichen Wandel. Schorndorf. 1987. S.243-245. ここでは、陸上競技と軍事的要素の「融合」に果たした Diem の役割についても指摘されている。
- ³⁰⁾ Christiane Eisenberg. Massensport in der Weimarer Republik. Ein statistischer Überblick. in: Archiv für Sozialgeschichte. 33. 1993. S.166. S.168. XXI.Sport. Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich. 1907. S.356.
- ³¹⁾ Kurt Doerry. Die Prinz-Heinrich-Fahrt 1911. in: Sport im Bild. Nr.28. 14.6.1911. S.796. G. v. Arnauld de la Perière. Prinz Heinrich von Preußen. Admiral und Flieger. Herford. 1983. S.50-51.
- ³²⁾ Walther Moede. Der Wetteifer, seine Struktur und sein Ausmaß. Ein Beitrag zur experimentellen Gruppenpsychologie. in: Zeitschrift für pädagogische Psychologie und experimentelle Pädagogik. 15. 1914. S.358.
- ³³⁾ 会員制限という封建的な特徴を伴っていた皇帝のクラブが大衆化する大きな要因は、上流階級自らが「各々の地位と身分をもった教養人」と知り合うことを重視したことにあった。「多様な人々が一つの場所に集まる」というのが Wilhelm が説明した意図であった (Johan C. G. Röhl. Kaiser, Hof und Staat. Willhelm II. und die deutsche Politik. München. 1988. S.114)。
- ³⁴⁾ Eisenberg, Englisch Sports, S.241.
- ³⁵⁾ Athletik-Jahrbuch. 1911. S.137-138.
- ³⁶⁾ Carl Liesenberg. Persönliche, geschäftliche, politische Reklame. Lehrbuch der Reklamekunst, deren Wesen, Bedeutung und Konsequenzen. Neustadt a. d. Haardt. 1912. S.263.
- ³⁷⁾ Das Allgemeine Berliner Sportfest 1899 in Grünau. in: Sport im Wort. Nr.21. 25.8.1899. S.166.
- ³⁸⁾ Sport im Bild. Nr.11. 7.9.1895. S.154.
- ³⁹⁾ Diem, Leben, S.68.
- ⁴⁰⁾ Edmund Neuendorff. Geschichte der deutschen Leibesübung vom Beginn des 18. Jahrhunderts bis zu Jahn : mit einem Grundriss der Geschichte der deutschen Leibesübung von den Urzeiten bis zum Beginn des 18. Jahrhunderts. Bd.4. S.487-488.
- ⁴¹⁾ Wilhelm Angerstein. Die Bedeutung der Leibesübungen-Turnen, Sport, Berufsgymnastik-für die Kulturentwicklung. in: Monatschrift für Turnwesen. 7. 1888. S.332-339.
- ⁴²⁾ Neuendorff, Geschichte, Bd.4, S.486-487. Wilhelm Rolfs. “Sport”. in: Zeitschrift für Turnen und Jugendspiel. 1896. S.225-226. 成田十次郎. 近代スポーツ史 III. ドイツ体育連盟の発展. 不昧堂. 2002. p.213.
- ⁴³⁾ O.Reinhardt. Der akademische Turnverein zu Berlin und seine Spiele in Schönholz. in: Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele. 2. 1893. S.68. Grassl. Sport oder körperliche Arbeit? in: Soziale Medizin und Hygiene. 5. 1910. S.1-12.
- ⁴⁴⁾ Heinrich Steinitzer. Sport und Kultur mit besonderer Berücksichtigung des Bergsports München. 1910. S.32.
- ⁴⁵⁾ Eisneberg, Englisch Sports, S.251-252.
- ⁴⁶⁾ Steinitzer, Sport, S.21.

- ⁴⁷⁾ Eisneberg, *Englisch Sports*, S.252.
- ⁴⁸⁾ 唐木國彦, 「トゥルネン＝スポーツ抗争」と労働者体育家連盟. 一橋論叢. 1977. p.22.
- ⁴⁹⁾ “Spielbetrieb”. in: *Jahrbuch der Turnkunst*. 1913. S.102. Eerke U. Hamer. *Die Anfänge der “Spielbewegung” in Deutschland*. London. 1989. S.596-597.
- ⁵⁰⁾ Hans Langenfeld. *Aristokratischer Sport im Wilhelminischen Deutschland*. in: Wolfgang Buss/Arnd Krüger(Hg.). *Sportgeschichte. Traditionspflege und Wertewandel*. Duderstadt. 1985. S.69.
- ⁵¹⁾ Robert Jacoby u.a.(Hg.). *Ueber den Wert des deutschen Turnens. Eine Sammlung von Urteilen hervorragender Zeitgenossen*. Crefeld. 1913. S.1-2. 「スポーツ」を優遇し「トゥルネン」を軽視する Wilhelm II 世の態度への体操家の嘆きは次の記事にも示されている。Dux, *Ein Ruf*, S.181.
- ⁵²⁾ Otto Wedler. *Turnen und Sport in der Presse*. in: *Deutsche Vorturner-Zeitung*. Nr.42. 19.10.1913. S.506. Rupprecht, *Entwicklung*, S.30-31.
- ⁵³⁾ Neuendorff, *Leibesübungen*, Bd.4, S.487.
- ⁵⁴⁾ Wedler, *Turnen*, S.506.
- ⁵⁵⁾ Ferdinand August Schmidt. *Anleitung zu Wettkämpfen, Spielen und turnerischen Vorführungen bei Volks- und Jugendfesten*. Leipzig. 1896. S.16-17.
- ⁵⁶⁾ J.R.. *Der Velodrom Rotherbaum in Hamburg*. in: *Sport im Bild*. Nr.30. 29.7.1898. S.488. *Vom Berliner Wintervelodrom*. in *Sport im Bild*. Nr.12. 19.3.1909. S.336.
- ⁵⁷⁾ J.E.. *Sport oder Turnen!* in: *Sport im Bild*. Nr.33. 19.8.1898. S.539. Dux, *Ein Ruf*, S.181.
- ⁵⁸⁾ *Sport im Bild*. Nr.11. 7.9.1895. S.151.
- ⁵⁹⁾ Michael Krüger. “Das Turnen als reaktionäres Mittel” – Wilhelm Angerstein und Disziplinierung des Turnens. in: *Sportwissenschaft*. 23. 1993. S.9-34. (翻訳：有賀郁敏. 19世紀ドイツ・トゥルネン史研究課題における身体と権力をめぐる幾つかの問題提起. 現代スポーツ研究会発表資料. 1996. p.1-16.)
- ⁶⁰⁾ Krüger, *Das Turnen*, S.31. 翻訳：有賀, p.13.
- ⁶¹⁾ Neuendorff, *Leibesübungen*, Bd.4, S.500.
- ⁶²⁾ *Kraft und Schönheit*. *Illustrierte Zeitschrift des Deutschen Vereins für vernünftige Leibesucht*. Berlin. 1902. Andreas Krägermann/Florian Schneider. *Die Geschichte der deutschen Kraftsportliteratur*. in: *Sportrevue. Zeitschrift für Körpertraining, Fitneß und Muskelaufbau*. Nr.12. 1993. S.52-60.
- ⁶³⁾ *Der Rekord*. Nr.6. 5.6.1913. S.22.
- ⁶⁴⁾ *Kraft und Schönheit*. 6. 1902. S.68. *Turnen und Schönheit*. in: *Jahrbuch der Turnkunst*. 2. 1908. S.244.
- ⁶⁵⁾ Willibald Gebhardt. *Die Heilkraft des Lichtes. Entwurf einer wissenschaftlichen Begründung des Licht-Heilverfahrens (Phototherapie)*. Leipzig. 1898. S.IV. アーク灯による放射線（今日の日焼けマシーン）で、リュウマチ、喘息などを治療しようとするもの。トレーニングともみなされていた。
- ⁶⁶⁾ Wilhelm Rolfs. *Die Deutschen Kampfspiele*. in: *Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele*. 23. 1914. S.52.
- ⁶⁷⁾ Arthur Mallwitz. *Die Sportabteilung der Internationalen Hygiene-Ausstellung*. in: *Körper und Geist*. 30.6.1911. S.98-100. Willibald Gebhardt. *Der Sport auf der Weltausstellung in St.Louis*. in: *Sport im Bild*. Nr.42. 16.10.1903. S.662.
- ⁶⁸⁾ Karl Lennartz. *Geschichte des Deutschen Reichsausschusses für Olympische Spiele*. H.3. Bonn. 1985. S.145-146.
- ⁶⁹⁾ Lennartz, *Geschichte* H.3, S.146. *Der Turner aus Sachsen*. *Kreisblatt für den Turnkreis Sachsen*. XIV. *Kreis der Deutschen Turnerschaft*. 9. 1903. S.621-622. *Gelehrten zum Vorbild. Kraft und Schönheit*. 1901. H.9. S.96.
- ⁷⁰⁾ J.E., *Sport*, S.540-541.
- ⁷¹⁾ St. Zentzytzki. *Deutscher Bobsleigh-Sport*. in: *Sport im Bild*. Nr.7. 14.2.1913. S.196.
- ⁷²⁾ St. Zentzytzki. *Deutscher Bobsleigh-Sport*. in: *Sport im Bild*. Nr.7. 14.2.1913. S.196.
- ⁷³⁾ Dux, *Ein Ruf*, S.181.
- ⁷⁴⁾ Hajo Bernett. *Grundformen der Leibeserziehung*. Schorndorf. 1975. S.42-43. Carl Euler. *Enzyklopädisches Handbuch des gesamten Turnwesens*. Bd.3. Wien/Leipzig. 1896. S.499-501. *Turnfestordnung für die Deutsche Turnerschaft*. in: *Deutsche Turnzeitung*. 33. 1879. S.279.
- ⁷⁵⁾ Bernett, *Grundformen*, S.41.
- ⁷⁶⁾ Rudolf Gasch. *Turnen und Sport*. in: *Jahrbuch der Turnkunst*. 1911. S.195-196. Neuendorff, *Geschichte*, S.486-487.
- ⁷⁷⁾ Karl Lennartz/Walter Teutenberg. *Die Olympischen Spiele 1906 in Athen*. Kassel. S.241.
- ⁷⁸⁾ Kurt Doerry. *Die “Qual” im Sport*. in: *Über Land und Meer*. Nr.46. 1903. S.1012.
- ⁷⁹⁾ Doerry, *Die “Qual”*, S.1013.
- ⁸⁰⁾ Carl Diem. “Ich warne vor Übertreibung”. in: *Der Jungdeutschlandbund*. Nr.4. 15.2.1913. S.50-51.
- ⁸¹⁾ Carl Diem. *Sport ist Kampf(1908)*. in: *Olympische Flamme*. Bd.1. Berlin. 1942. S.30.
- ⁸²⁾ Anton Fendrich. *Sport und Kultur*. in: *Sozialistische Monatshefte*. 3. 1911. S.1246.
- ⁸³⁾ *Turnen und Schönheit*, S.244.
- ⁸⁴⁾ Lennartz, *Geschichte* H.3, S.108-109. *Deutsche Turnzeitung*. 19.3.1908. H.12. S.217.
- ⁸⁵⁾ 成田, *ドイツ体育連盟の発展*, pp.225-260. Arnd Krüger. *The German Sonderweg in Turnen and Sport. 1870-1914. What’s so German about the Germans?* in: 成田十次郎先

- 生退官記念会編. 体育・スポーツ史研究の展望—国際的課題と課題一. 不昧堂. 1996. pp.585-607. Lennartz, Geschichte H.1-H.3. Eisenberg, Englisch Sports, S.273-291.
- ⁸⁶⁾ Lothar Werner. Der Alldeutsche Verband 1890-1918. Ein Beitrag zur Geschichte der öffentlichen Meinung in Deutschland in den Jahren vor und während des Weltkrieges. Berlin. 1935. S.63-66. Dieter Langewiesche. Liberalismus in Deutschland. Frankfurt. 1988. S.156-158. S.328.
- ⁸⁷⁾ Bernhard Mann. Biographisches Handbuch für das Preußische Abgeordnetenhaus 1867-1918. Düsseldorf. 1988. S.2007.
- ⁸⁸⁾ Bernhard Mann. Biographisches Handbuch für das Preußische Abgeordnetenhaus 1867-1918. Düsseldorf. 1988. S.2007.
- ⁸⁹⁾ J.Marker. Dr. med. h.c. Emil Freiherr von Schenkendorff (1837-1915) und seine Stellung zum Turnen. in: Deutsche Turnen. 1965. H.4. S.97. Hamer, Die Anfänge der “Spielbewegung”, S.566. S.571-572. Hermann Raydt. Die Gründung des Zentralausschusses in Berlin am 21. Mai 1981. in: Körper und Geist. 16. 1907/8. 2. S.41-42.
- ⁹⁰⁾ Gustav von Goßler. Ansprachen und Reden des Königlichen Staatsministers der geistlichen. Unterrichts- und Medizinal-Angelegenheiten. Berlin. 1890. S.189-193.
- ⁹¹⁾ Rudolf Fechter. Die Wehrerziehung der deutschen Jugend von 1871 bis 1914. Heidelberg. 1944. S.48-49.
- ⁹²⁾ Hamer, Anfänge der “Spielbewegung”, S.572-575. Raydt, Die Gründung des Zentralausschusses, S.45.
- ⁹³⁾ Rolfs, Die Deutschen Kampfspiele, S.53. S.55. S.64-65. Ernst Witte. Wie sind die öffentlichen Feste des deutschen Volkes zeitgemäß zu reformieren und zu wahren Volksfesten zu gestalten? in: Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele. 1. 1896. S.4-5. S.10-11.
- ⁹⁴⁾ Hamer, Die Anfänge der “Spielbewegung”, S.589-590.
- ⁹⁵⁾ Eisenberg, Englisch Sports, S.271.
- ⁹⁶⁾ Karl Lennartz. Geschichte des Deutschen Reichsausschusses für Olympische Spiele. H.1. Bonn. 1981. S.S.60. Rolfs, Die Deutschen Kampfspiele, S.62.
- ⁹⁷⁾ Eisenberg, Englisch Sports, S.271.
- ⁹⁸⁾ Hermann Raydt. Nationaltage für deutsche Kampfspiele (Deutsch-nationales Olympia). Leipzig. 1898. S.11-12. Rolfs, Die Deutschen Kampfspiele, S.56. S.60. S.61.
- ⁹⁹⁾ Rolfs, Die Deutschen Kampfspiele, S.63. Hamer, Die Anfänge der “Spielbewegung”, S.599-604.
- ¹⁰⁰⁾ Hamer, Die Anfänge der “Spielbewegung”, S.599-604.
- ¹⁰¹⁾ Lennartz, Reichsausschuß, H.1, S.31-33.
- ¹⁰²⁾ 1867年に創設されたジョッキークラブ。国家・軍事目的と結びつき、貴族を中心に構成され、豊富な資金力を備える排他的なクラブであった。メンバーには Otto von Bismarck や Victor von Podbielski も含まれていた。Eisenberg, Englisch Sports, S.165-168.
- ¹⁰³⁾ Eisenberg, Englisch Sports, S.274. Edmund Neuendorff. Die Deutsche Turnerschaft 1860-1936. Berlin. 1936. S.132-133.
- ¹⁰⁴⁾ Siegfried Below. Frank Neumann. Dr. Willibald Gebhardt und die “Allgemeine Ausstellung für Sport, Spiel und Turnen” 1895 in Berlin. in: Theorie und Praxis der Körperkultur. 39. 1990. S.203. Karl Adolf Scherer. 75 Olympische Jahre. Eine Dokumentation über olympische Bewegung in Deutschland 1895-1970. München. 1972. S.22-23.
- ¹⁰⁵⁾ Michael Peters. Der Alldeutsche Verband am Vorabend des Ersten Weltkrieges(1908-1914). Ein Beitrag zur Geschichte des völkischen Nationalismus im spätwilhelminischen Deutschland. Frankfurt. 1992. S.18-19. Eisenberg, Englisch Sports, S.274.
- ¹⁰⁶⁾ Die Auszüge aus einem Protokoll des Deutschen Bundes für Sport, Spiel und Turnen und aus einem Brief Gebhardts. in : Carl-Diem- Institut(Hg.). Dokumente zur Frühgeschichte der Olympischen Bewegung. Köln. 1970. S.10-19.
- ¹⁰⁷⁾ Lennartz, Reichsausschuß, H.1, S.34-35.
- ¹⁰⁸⁾ Lennartz, Reichsausschuß, H.1, S.35.
- ¹⁰⁹⁾ Volker Kluge. Willibald Gebhardts Lebensspuren in Berlin. in: Roland Naul/Manfred Lämmer(Hg.). Willibald Gebhardt – Pionier der Olympischen Bewegung. 1999. Aachen. S.31. Eerke U. Hamer. Willibald Gebhardt. Der erste deutsche Treuhänder des Olympischen Gedankens. Köln. o.J. S.37. Eisenberg, Englisch Sports, S.275.
- ¹¹⁰⁾ Hamer, Gebhardt, S.33-34. Gebhardt, Der Sport auf der Weltausstellung, S.662.
- ¹¹¹⁾ Richard D. Mandell. Die ersten Olympischen Spiele der Neuzeit. Kastellaun. 1976. S.76-77.
- ¹¹²⁾ Scherer, 75 Olympische Jahre, S.20. S.26. S.29. S.31. Lennartz, Reichsausschuß, H.1, S.39-40.
- ¹¹³⁾ Neuendorff. Die Deutsche Turnerschaft, S.133.
- ¹¹⁴⁾ Die Bemerkung von Theodor Lewald in der 216. Sitzung des Deutschen Reichstages vom 17.2.1914. in: Stenographische Berichte des Deutschen Reichstages. Bd.293. Berlin. 1914. S.7340. 成田, ドイツ体育連盟の発展, p.246-248.
- ¹¹⁵⁾ Klaus Huhn. Der vergessene Olympier. Das erstaunliche Leben des Dr. Willibald Gebhardt. Berlin. 1992. S.25.
- ¹¹⁶⁾ Eisenberg, Englisch Sports, S.278.
- ¹¹⁷⁾ 青年ドイツ同盟は、プロイセン国防省によって準軍備的な青少年組織を統合するために、1911年に設立された組織である。国防省は副指導者の一人に、社会民主主義的なプロパガンダから青少年を保護しうる「スポーツによる『意志』の形成」を主張していた Diem を推薦した。Eisenberg, Englisch Sports, S.268-269.
- ¹¹⁸⁾ Carl Diem. Das Stadion als Stätte deutscher Kunst. in: Das

- Deutsche Stadion. Sport und Turnen in Deutschland 1913. Eine Denkschrift für das deutsche Volk. Charlottenburg. 1913. S.11. Otto March. Das Stadion im Grunewald. Der Bau. in: Das Deutsche Stadion. Sport und Turnen in Deutschland 1913. Eine Denkschrift für das deutsche Volk. Charlottenbur. 1913. S.13-24.
- ¹¹⁹⁾ Umminger, Die Chronik, S.275.
- ¹²⁰⁾ Diem, Das Stadion, S.11.
- ¹²¹⁾ Viktor von Podbielski. Eine Würdigung seines Wirkens für den deutschen Sport. in: Illustrierter Sport. Nr.8. 24.2.1914. Umschau. in: Der Rekord. Nr.8. 19.6.1913. S.5.
- ¹²²⁾ Karl Lennartz. VI. Olympische Spiele Berlin 1916. in: Stadion. 6. 1980. S.238-240.
- ¹²³⁾ in: Der Rekord. 1913. カール・ディーム (福岡孝行訳). スポーツの本質と基礎. 法政大学出版局. 1966. S.24.
- ¹²⁴⁾ 成田, ドイツ体育連盟の発展, pp.245-248.
- ¹²⁵⁾ 同上, pp.251-252.
- ¹²⁶⁾ Das deutsche Stadion und das Ausland. Englische und französische Blätterstimmen über das Einweihungsfest. in: Der Rekord. Nr.9. 26.6.1913. S.11. Umschau. in: Der Rekord. Nr.7. 12.6.1913. S.5.
- ¹²⁷⁾ Umminger, Die Chronik, S.275.
- ¹²⁸⁾ Diem, Leben, S.86.
- ¹²⁹⁾ Stenographische Berichte des Deutschen Reichstages. Bd.293. Berlin. 1914. S.7333-7335. S.7344. Eisenberg, Englisch Sports, S.284.
- ¹³⁰⁾ Diem, Leben, S.86. Scherer, 75 Olympische Jahre, S.55.
- ¹³¹⁾ Elisabeth Fehrenbach. Wandlungen des deutschen Kaisergedankens 1871-1918. München. 1969. S.226.
- ¹³²⁾ Die Bemerkung von Theodor Lewald in der 216, S.7340.
- ¹³³⁾ 例えば, Vernichtetes. in: Spoort im Wort. Nr.26. 29.9.1899. S.209.
- ¹³⁴⁾ 例えば, Album der Olympischen Spiele 1912. Berlin-Schöneberg. 1912. S.50.
- ¹³⁵⁾ Eisenberg, Englisch Sports, S.286.
- ¹³⁶⁾ Die Anrede in einem Brief Walter v. Reichenaus an Diem. 9.12.1913(in: Carl und Liselott Diem-Institut -Korrespondenzen).
- ¹³⁷⁾ Carl Diem. Walter von Reichenau zum Gedächtnis. o.O. in: Carl und Liselott Diem-Institut-Sachakte. Nr.691. 1942. S.7.
- ¹³⁸⁾ Walter von Reichenau. Bericht über die Sport-Studienreise nach den Vereinigten Staaten von Amerika. vom 16.11.1913. S.5. in: Carl und Liselott Diem-Institut-Sachakte. Nr.651. Walter von Reichenau. Sportliche Erziehung in der Armee. in: Athletik-Jahrbuch. 9. 1913. S.96.

¹³⁹⁾ Die Umschau in: Der Rekord 29. 13.11.1913. S.6.

¹⁴⁰⁾ Diemはその功績を自らのものとみなしている。Carl Diem an John Dixon vom 25.8.1947(in: Carl und Liselott Diem-Institut -Korrespondenzen). S.2-3.

¹⁴¹⁾ Reichenau, Bericht über die Sport-Studienreise, S.5. Reichenau, Sportliche Erziehung, S.96.

¹⁴²⁾ 例えば, Maurice Maeterlinck. Gedanken über Sport und Krieg. Leipzig. 1907. S.67. Martin Berner. Der olympische Gedanke in der Welt. in: Fußball und Leichtathletik. 14. 1913. S.499.

図の出典一覧

図 1 : Carl-Diem-Institut. Dokumente zum Aufbau des deutschen Sports. Das Wirken von Carl Diem(1882-1962). Sankt Augustin. 1984. S.7.

図 2 : Christiane Eisenberg. Englisch Sports und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939. Ferdinand Schöningh Verlag. Paderborn/München/Wien/Zürich. 1999.

図 3 : Eisenberg, Englisch Sports.

図 4 : Wolfgang Ruppert. Fahrrad, Auto, Fernsehschrank. Zur Kulturgeschichte der Alltagsdinge. Frankfurt/M. 1993. S.12.

図 5 : Kurt Doerry. Die Prinz-Heinrich-Fahrt 1911. in: Sport im Bild. Nr.28. 14.6.1911. S.793.

図 6 : Eisenberg, Englisch Sports.

図 7 : Eisenberg, Englisch Sports.

図 8 : 左上・Eisenberg, Englisch Sports. 右上・Michael Krüger. Einführung in die Geschichte der Leibeserziehung und des Sports. Teil 3 : Leibesübungen im 20. Jahrhundert. Sport für alle. 2.,neu bearbeitete Auflage. Schorndorf. 2005. S.101. 下・Richard Nordhausen(Hg.). Sport und Körperpflege. Leipzig. 1910. S.159.

図 9 : Andreas Krägermann/Florian Schneider. Die Geschichte der deutschen Kraftsportliteratur. in: Sportrevue. Zeitschrift für Körpertraining, Fitneß und Muskelaufbau. Nr.12. 1993. S.53.

図10 : 上・Kraft und Schönheit. 5. 1902. S.56. 中・Kraft und Schönheit. 5. 1902. S.62. 下・Eisenberg, Englisch Sports.

図11 : Turnen und Schönheit. in: Jahrbuch der Turnkunst. 2. 1908. S.244.

図12 : Das Deutsche Stadion. Charlottenburg. 1913. S.13. S.16. S.18. S.19. S.21. S.22. S.23.

図13 : Umminger, Die Chronik des Sports, S.275.

(2009.1.14受理)